

平成22年度 文化庁購入文化財一覧

【絵画】

- 1 紙本著色 野郎歌舞伎 図 〈六曲屏風〉 一双
しほんちやくしよく やろうかぶき ず ろくきよくびようぶ
ふじょゆうがく 婦女遊楽



重要文化財

(昭和34年12月18日)

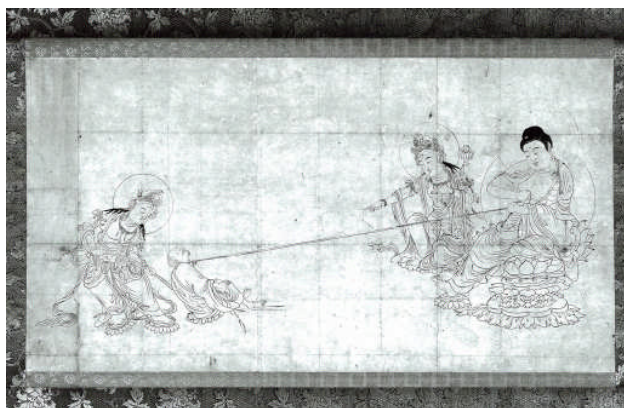
江戸時代

各縦154.5cm

各横343.0cm



右隻は、歌舞伎舞台上で頭巾を被り、刀を差し揃いの衣装をつけて総踊りする役者を横一列に描いており、野郎歌舞伎を描いた類例希な作品と考えられている。左隻には文を読む女性、屋内で双六に興ずる三人、双六、ウンズンカルタで遊ぶ二人、文を書く者、別室で囲碁をする三人等を描く。女性たちの着衣は金銀を多用し、絞り、摺箔等色彩豊かに描かれ、その風俗は野郎歌舞伎が禁止された承応元年（1652）よりさかのぼるものとみても矛盾しない。屋根より上の画面上辺、及び画面下方の金箔擦しによる霞より下は後補であるが、当初部分は満開の桜等に盛り上げ彩色がみられる等、保存のよい重厚な賦彩が桃山の余香をのこす近世初期風俗画の優品である。



平安時代

縦 52.7 cm

横 98.6 cm

本図は、あらゆる衆生を引き寄せ済度するという阿弥陀如来の本願に基づき行われる密教修法「阿弥陀鉤召法」の意義を戯画的に描いたものである。暢達した墨描により、盲目の僧を力強く引き寄せようとする阿弥陀如来、僧を蓮華茎で押す観音菩薩、その光景を眺める勢至菩薩の姿が大画面に巧みに描かれる。

本図裏面には、平安時代末に高野山を中心に密教図像の収集、書写に努めた玄証（1146～1222頃）の墨書がある。玄証の花押や墨書を有する図像は、高野山月上院を経て京都・高山寺に多く伝来し、指定品を含めた二十点ほどの現存作例を数える。本図も鎌倉時代以降、高山寺に伝来した可能性が高く、これらの玄証所縁の図像中でも特に優れたものである。

本図は、平安時代に遡る大型の白描図像として、またその画題の特殊性から、仏教絵画史上のみならず、国宝「鳥獣人物戯画」等の我が国における白描戯画の成立を考える上でも、文化史上貴重な位置を占める作例といえる。

【彫刻】

- 3 もくぞうしやかによらいりゆうぞう 木造釈迦如来立像 〈／（本堂安置）〉 一軀



重要文化財

（昭和13年8月26日指定）

鎌倉時代

像高97.0cm

嵯峨清凉寺の本尊，釈迦如来像（北宋時代）の模刻で，原像の姿を忠実に写しながらも繊細な彫技により優美な像容に仕立てている。

鎌倉前期の代表的な京都仏師である院賢の手になる可能性が高く，類品中の代表作の一つである。



重要文化財

(昭和4年4月6日指定)

平安時代

像高 113.4 cm

奈良・伝香寺旧蔵の聖観音立像で、本体と共木で彫出される筒形の冠や、下ぶくれの輪郭で伏し目のおっとりとした顔つき、翻波式の名残をとどめながら浅く整えられた衣文線、太づくりだが緩やかな肉取りの体軀などに平安時代、十世紀後半頃の特徴を示しており、しかもできばえはその時代のものとして大変すぐれている。肉身部を漆箔、衣部を彩色とする表面仕上げも当初のものをとどめており貴重である。

5 もくぞうてんのうりゆうぞう
木造天王立像

一 軀



平安時代

像高 178.4 cm

京都・大宮神社伝来の仏像群の一体で、左手を振上げて立つ神将形像である。大振りの目鼻立ちによる忿怒相，肉取りに抑揚のある体軀，力強い衣文の彫り口に平安初期風をみせ，足下に踏む邪鬼や天衣遊離部まで共木で彫出する構造も古式であるが，やや腰が細く，雰囲気に穏やかさを増している点から十世紀半ば～後半頃の作とみられる。この時期の神将像としては大型かつ製作優秀な作例である。

【工芸品】

6 くさばなくじやくもんけい 草花孔雀文磬

一面



重要文化財

(昭和28年3月31日指定)

平安時代後期(12世紀)

最大幅15.0cm

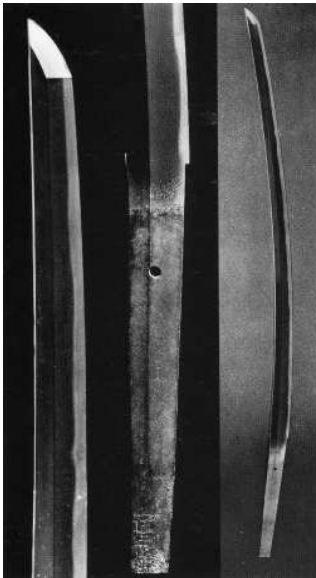
高7.0cm

縁厚0.6cm

裏表を同じ文様とし、中央にぶつそうげ仏桑花のつきざ撞座を配し、その左右に翼を張り尾を上げる孔雀を向かい合わせ、下方に小草を、撞座の上には蝶を表している。鏡背の文様に類似する洒脱な構成とし、平安時代後期の時代性をよく表した優品である。

7 太刀 ^{たち} 〈銘包永^{めいかねなが}ノ〉

一口



重要文化財

(昭和17年6月26日指定)

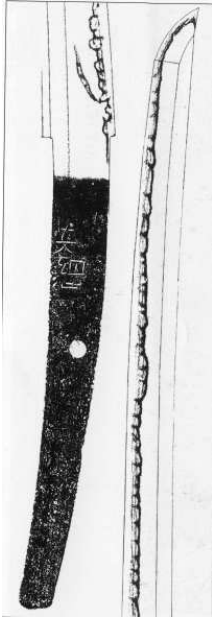
鎌倉時代(13世紀)

刃長 71.0 cm

東大寺^{てがい}転害門の西側に居住したことから大和^{てがい}転害派と呼ばれる。本作品の作者である包永は、転害派の祖といわれ鎌倉時代に活躍した名工である。典型的な包永の作風を示すとともに茎は生ぶで貴重な遺例である。

8 太刀〈銘安綱／〉

一口



重要文化財

(昭和29年3月20日指定)

平安時代中期(11世紀)

刃長74.8 cm

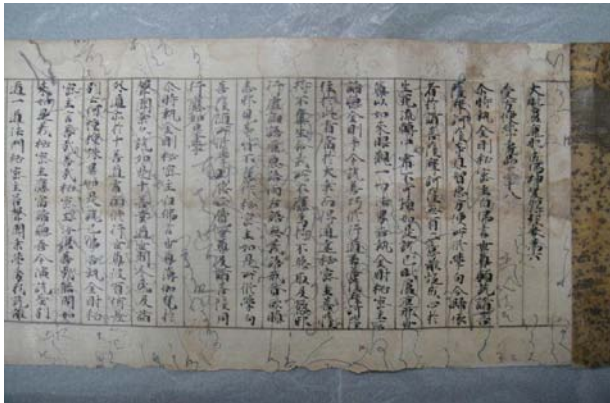
反り3.1 cm

平安時代中期に活躍した伯耆国安綱の太刀で、細身で腰反りが高くこきつさき小鋒の優雅な姿は、平安時代中・後期の日本刀の特色をよく示している。安綱の在銘作品は極めて少なく、また茎も生ぶであり貴重な遺例である。

【書跡】

9 大毗盧遮那成 仏経 ^{だいびるしやなじょうぶつきよう} ^{かんだい} 〈巻第六ノ〉

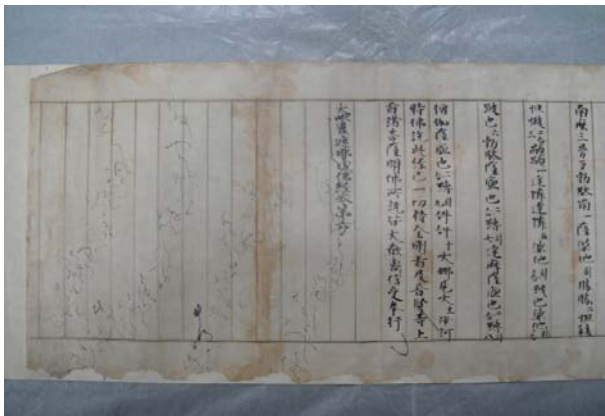
一卷



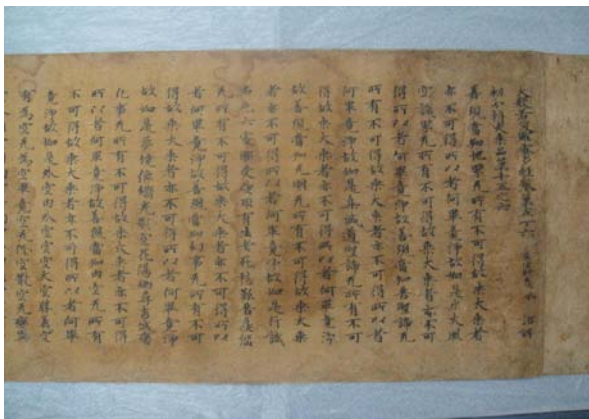
重要文化財

(昭和9年1月30日指定)

平安時代



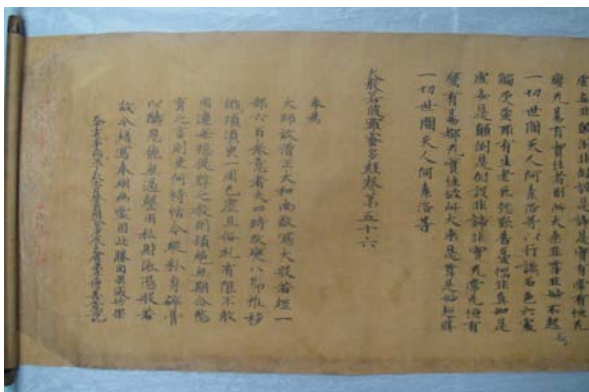
本経は、平安時代後期の消息経の稀有な遺例である。消息経は死者への供養経として、故人の消息を継ぎ、その紙背などに法華経などを写経したものである。本巻は、流麗な草仮名を散し書きした消息を継ぎ、写経のための銀泥にて界線を引き、また装飾のために雲母を引いて料紙を荘厳している。



重要文化財

(昭和13年7月4日指定)

奈良時代



本経は、玄昉（?～746）の入唐中の弟子であった唐僧善意が、玄昉の一周忌に当たる天平十九年（747）に私財を投じて追善供養のために書写した『大般若経』の遺巻である。巻末に天平十九年十一月八日附の善意の願文が記されており、唐僧善意願経とも称される。

本巻のほか、根津美術館などわずかに現存するのみであり、また奈良中期における大般若経写経の優品である。



鎌倉時代

本書は、大江匡房（1041～1111）の撰述になるもので、慶滋保胤（？～1002）『日本往生極楽記』以後の遺漏を補い、康和年間（1009～1103）の成立とされる。往生人は一条天皇から源忠遠妻に至る42人で、身分の高下に従って配列されている。鎌倉時代中期書写になる古写本で、平安時代後期における貴族らの浄土観の特質が窺える往生伝として極めて価値が高い。

【工芸技術資料】

1 2 にごしでぶどうもんつぼ 濁手葡萄文壺 一点



かきえもんせいとうぎじゆつほぞんかい 柿右衛門製陶技術保存会 作
(重要無形文化財「にごしで柿右衛門(濁手)」
保持団体)

平成 15 年 (2003 年)

高 31.1 c m 径 19.1 c m

江戸時代前期，柿右衛門様式の主要な製品となった，いわゆるじんこうつぼ沈香壺形の広口有蓋壺である。成形は轆轤により，壺の肩から胴にかけての張り具合とつぼぶち鑲縁を持つ蓋とが程よいバランスを保つ。文様は伝統的な唐草地文を蓋の側面と肩の周囲に繊細に描き込み，胴の部分には同じく伝統的な葡萄文様を大胆に余白を生かして描くことにより，形と文様とが一体となった現代の作品としている。

13 彩刻磁鉢 一点



いしぼし ゆうし 作
石橋 裕史 作

平成22年（2010年）

第57回日本伝統工芸展

文部科学大臣賞

縦 41.0cm, 横 44.7cm, 高 28.0cm

器の外側に流線模様，内側には大気をイメージしたグラデーションを施し，「海に抱擁された世界」を表現した。素材は柿谷陶石^{かきたにとうせき}を主に，更に白さを追求するために天草陶石^{あまくさとうせき}を加えて用いた。成形には轆轤を用い，口縁部を鉋で削った。釉薬は天草陶石を基本材料とし，媒溶原料として柞灰^{いすばい}を加え，発色を助けるために微量の炭酸バリウムを加えた。時間をかけてむらなく還元焼成を行い，鮮やかな水色に発色させた。焼成時に，熱により生ずるたわみの効果を狙い，円形の器を自然な楕円形に変化させた。

焼成後，器の表面にサンドブラストによって文様を施した。器の表面の青色は，削られるほど色が淡くなり，磁器本来の白地に近くなるので，マスキングテープを貼ることによって砂の当たり具合を調節し，削りの深さに強弱をつけて青から白に至る色層の帯をグラデーションに削り出した。

第57回日本伝統工芸展文部科学大臣賞受賞作。

14 くめじまつむぎきじゃく 久米島紬着尺 しまいと 島糸 いがすり 井絣・じゅうじがすり 十字絣・ヒチサギ 一点



くめじまつむぎほじだんたい
久米島紬保持団体 作

(重要無形文化財「久米島紬」保持団体)

平成19年(2007)

幅 38.0cm 長さ 12m80 cm

糸はすべて久米島産で、経糸に引き糸、緯糸に紬糸が用いられている。

絣文様は、白のヒチサギ(ずらし絣)、赤の井絣(井桁絣)、黄色の十字絣を組み合わせたものである。

染色には、久米島で伝統的に使用されてきた染料が用いられ、黄はヤマモモとクルポー(ナカハラクロキ)の樹皮、赤はグール(サルトリイバラ)の根で染め、地色の黒は、グールの根とシャリンバイ(テカチ)の幹で染めた後、泥媒染を行ったものである。

1 5 わじまぬりにものわんせいさくこうていみほん 輪島塗煮物椀制作工程見本 一式

わじまぬりぎじゅつほぞんかい
輪島塗技術保存会 作

(重要無形文化財「輪島塗」保持団体)

平成12年(2000)

径14.1 cm, 高9.0 cm (完成作品)

煮物椀(蓋付き)の制作工程見本32点(原材料2点, 工程見本30点)及び付属品の下地用具, 原材料の一部からなる。完成作品は黒漆塗1点, 蒔絵2点, 沈金2点の5点。内訳は次のとおりである。

(1) 原材料

あらがた ①荒型 あらび ②荒挽き

(2) 工程見本

①椀木地(以上, 木地工程) ②切彫り・木地固め ③木地拵え

④詰め刻苧・引き刻苧 ⑤木地磨き ⑥布着せ ⑦布削り

⑧惣身付け ⑨惣身磨き ⑩一辺地付け ⑪空研ぎ ⑫二辺地

付け ⑬二辺地研ぎ ⑭三辺地付け ⑮地研ぎ ⑯地固め(以

上, 下地工程) ⑰中塗 ⑱錆ざらえ ⑲中塗研ぎ(こしらえもん)

⑳小中塗 ㉑小中塗研ぎ ㉒小中塗(2回目) ㉓拭き上げ ㉔上塗

(以上, 塗工程) ㉕胴擦 ㉖艶上げ(呂色(磨き)工程) ㉗沈金(椿文)

㉘蒔絵(葉文) ㉙蒔絵(楓文) ㉚沈金(梅文)

(以上, 加飾工程・完成作品)

(3) 付属品(鉋, 檜皮篋, 砥石等下地用具及び麻布)

16 たんおぼろぎんよほうばち 一点



たぐち としちか 作
田口 壽恒 作

(重要無形文化財「鍛金」保持者)

平成23年(2011)

工芸技術記録映画対象作品

縦30.2 cm, 横30.4 cm, 高13.8 cm

材質は、銅75%、銀25%の配合を基本とする合金の朧銀（四分一ともいう）で、これに極少量の金を加え（金一分差）、仕上がりの色に深みをもたせた。

厚さ3mmの板金から直径30cmの円盤を切り出し、中央から外側に向かって打ち上げていき、意図する大きさにしたところで四隅の稜線を作り出し、四方鉢を造形した。各面にそれぞれ1本又は2本の稜線を作り、形を引き締めた。鉢の外側には槌目を残し、内側は磨き上げ、内外の質感に変化をつけている。仕上げ磨きには鑢、セラミック砥石、研炭（朴炭、駿河炭）、炭粉を用いた。

その後、「荒し」によって外面の肌を艶消しとし、硫酸銅、緑青等で煮込んだ煮色仕上げにより、四分一の独特の銀灰色と風合いを活かして仕上げた。

平成22年度工芸技術記録映画「鍛金—田口壽恒のわざ—」の対象作品。

17 天道虫てんどうむし小金具こがね制作工程見本 一式
桂盛仁かつらもりひと作

(重要無形文化財「彫金」保持者)

平成14年(2002年)

縦3cm, 横2.5cm, 高さ1.5cm(完成品)

本作は、打出うちだしや着せ金きがね、置き金おがね、平象嵌ひらぞうがんなど伝統的な彫金技法を用いて、天道虫型の金具を制作する工程を30段階に分けて示したものである。

- (1) 使用する金属(銅・赤銅・金・銀)を決めてデザインし、色分けした平面図(原寸大)を作成する。
- (2) 油粘土でモデルを作る。
- (3) 厚さ1.2ミリの銅板に(1)のデザインを貼り、鑿で点線状の輪郭を打つ。
- (4) 木鑿で裏側から打ち出し、金属板をふくらませて立体感を出す。
- (5~16) ふくらませた銅板を表から鑿で打ち、肉取りを整え、腰(モチーフの立ち上がり)を寄せる。また、天道虫の顔や口など、細かい部分を鑿で作り込む。
- (17~18) 天道虫の顔の部をはつり、0.5~0.6ミリ厚の赤銅しやくどうを被せて着せ金を施す。また、天道虫の顔の先端部分をはつり、純金で置き金を施す。
- (19) 天道虫の形が整ったところで、鑿または糸鋸を使って板から切り取る。更にヤスリで形を整える。
- (20~25) 表面の細かな凹凸にヤスリがけしてから、羽の文様の部分をはつり、赤銅もんがねの紋金を嵌め込むひらぞうがん(平象嵌)。
- (26~29) 象嵌した金属表面をヤスリ、キサゲ、砥石、炭等を用いて磨き上げる。
- (30) 煮色液に浸して着色し、完成。